

どのような行為すべきなのか? (六)

——道徳についての生徒たちの会話——

E・トウーゲントハット／C・ロペス／A・M・ビクーニヤ 著

鈴木崇夫 訳

要旨 この章ではまず、動物にみられる本能的利他主義と人間にみられる規範的利他主義の違いが論じられ、本来の意味で道徳的と呼ばれるのは後者だけであるということが確認される。筆者たちは道徳の根本規範を、〈他の人びとに敬意を払うべきである、他の人びとを人として承認すべきである〉という義務のうちにみる。そして、他の人びとを人として承認するとは、他の人びとの権利を承認するということにほかならない、と述べる。次に、承認と敬意は共感（好感、好意、愛情）とは別のものだということが指摘される。というのも、共感には、あまりにも限界がありすぎ、また、不安定でもあるからだ。筆者たちによれば道徳は、共感の拡張といったものではなく、共感に備わる限界を補うものとみなされるべきである。最後に、暴力や戦争へと導きかねない反感（嫌悪、敵意、憎悪）という感情をどのように克服すべきなのか、という問題が取り扱われている。

キーワード：共感・反感、道徳、倫理

〔承前〕今回は、第七章を訳出した。原著（二〇〇〇年出版）は、ドイツのレクラム文庫の一冊。著者と著作の紹介、

および本翻訳開始の経緯については、『清泉女子大学人文科学研究所紀要』第二八号（二〇〇七年）所収の「訳者による前書き」に記してある。」

目次

序文

第一章 最もひどい犯罪行為は何か？

第二章 どんな種類の盗みも同じように人に害を与えるのか？

第三章 けっして他者を苦しめてはならないのか？

第四章 約束することと欺くこと

第五章 黄金律と敬意

第六章 連帯——人助けの義務

第七章 共感と反感

第八章 罰と責任

第九章 徳と自己決定

第十章 人生の意味

第七章 共感と反感

数日後、生物の授業で新しいテーマが扱われた。進化論である。担当のモンタ先生は、地球の歴史における生物

種の発達について大まかな説明を終えた。すると、すかさずグローリアが質問した。

「先生、もし私たち人間が動物界から発達してきたというのが本当なら、人としてお互いに敬意を払い合うといったことがいったいどのようにして始まったのでしょうか」

「動物たちは、道徳と呼べるものをまだ持つてはいません」

「本当ですか？」とエマヌエルは驚いて尋ねた。「動物たちだって、自分を顧みないで行動することがあるじゃないですか」

「まあ、それは〈道徳〉という言葉はどう定義するかによります。この言葉を単に利他的行為あるいは利他主義という意味で理解するのなら、もちろん動物も何らかの道徳を持つていることになります。しかし、〈道徳〉と〈利他主義〉というこの二つの言葉は区別したほうがよいです。動物にみられる利他主義は、本能に導かれたものですかね」

「利他主義って何でしょうか」とグローリアが質問した。

「利他主義は利己主義の反対です。自分の利益のためになされる行動は利己的と呼ばれます。他の人たちの利益のためになされる行動は利他的です。たとえば母親が子どものために自分を犠牲にするなら、それは利他的な行動です。人間が動物にかかわりなく、それを利他的と呼ぶことができます。あるいは、天敵の猛禽を目にして鳥が警告の叫びを発するのも、利他的な振る舞いです。というのも叫び声を出すことでその鳥は、他の鳥たちに天敵がいることを知らせるだけではなく、天敵の注意を自分に引き付けるからです。ただ動物の場合、そうした行動は本能のうちにあらかじめ組み込まれています。動物は一定の仕方で行動せざるをえないのです。それにひきかえ人間は、自分がどのように行動したいのか、よく考えてみることができます。人間の利他主義が少なくとも部分的には規範によって規定されるという事態は、そのことと関係があります」

「規範って何でしょうか」とマヌエルが質問した。

「規範とは、行動の規則のことです。規範があるところでは、〈当^{べき}為〉について語ることができます。たとえば、人を殺すべきではない」というふうだね。それにひきかえ、鳥が警告の叫びを発するのは、そうすべきだからという理由によるものではありません。鳥自身にとっては、理由というものはまったく存在していません。鳥がそうするのは、そうするほかないからです。ここに人間と動物との違いがあります。人間の場合は、行動すべきであるからといって、必ずそのとおりに行動するかというところまでたたくようではない。この意味で人間は自由なのです。つまり、人間は、行動すべきであるとは別なふうにも行動することができなのです。規範がすべて道徳的な命令であるわけではありません。たとえばゲームやスポーツの規則も規範ですし、規範には他にもいくつかの種類があります」

「では、道徳の特徴は何なのですか」とマヌエルが質問した。

「どんな規範が問題になっているのかを知りたいときには、その規範を守らないとどんなことが起こるだろうかと自問してみてください。チェスやサッカーをしているときにあなたがその規則に、つまりその規範に違反するならば、他の人たちはあなたとそれ以上チェスやサッカーを続けようとは思わなくなるでしょう。それとちがって、道徳的規範の特徴は、それに違反すると他の人たちが憤るといふ点にあります」

「憤りについては、先日イバラ先生が話してくれました。憤りと怒りと罪悪感とは密接に関係しているのだ、と先生は言っていました。他の人がそれをすれば憤りを招くような行動の場合、それを自分自身が行えばその人は罪悪感をいだくこととなります」

「そのとおり」とモンタ先生は言った。「そのため、こうした道徳的感情と道徳的規則とを関連づけられないでは、私たちは道徳的規則そのものを学ぶことができないのです。道徳的に何が命じられているのかについて私たちは、まずそれを学んで身につける必要があります。動物の場合とちがって、道徳的規則は本能に備わる法則性といったも

のではないのです。したがって人間の場合、利他主義は少なくとも部分的には規範にかかわる事柄であって、本来はこのような規範的利他主義だけを道徳的と呼ぶことができるのです。しかし、人間にみられるどの利他主義も道徳的であるというわけではありません。愛情や共感から行動する場合は、そのように行動すべきであるからという理由で私たちが行動しているわけではありませんからね。とはいえ、共感から行動しているときでも、その行動は動物の場合とはまったく性質を異にしています。なぜなら、私たちはいつだって、それとは別なふうに行動することもできるからです」

「よく理解できません」とアルヴァロが言った。「いつたい道徳的規範ということで具体的にどのようなことを考えているのですか」

「あなたたちはきつと黄金律のことは知っていますね——（人からされたくないことは人にもしてはならない）という例の規則です。さて、なぜそう行動すべきではないのでしょうか。ある根本的な規範が存在しているからだ、と私は考えています。その根本的な規範とは、他の人びとに敬意を払うべきである、他の人びとを人として承認すべきである、というものです。そして、他の人びとを人として承認するとは、他の人びとの権利を承認することにはかならない、というのが私の考えです。あらゆる人間が一定の権利を持っており、もしある人がとくに自分と近い関係にある場合には、たとえば自分の両親であったり友人であったりした場合には、その人は特別な権利を持っている——。そうしたことを私たちは当然のこととして受け容れています。他の人びとの権利には、私たちの義務が対応しています。aがbに対してある権利を持っているならば、bはaに対してある義務を負っていることとなります。そして逆に、bがaに対して義務を負っているとは、aがbに対して権利を持っているということにはかならないのです。さて、これで、道徳的利他主義と動物の利他主義との違いについていっそう明確な説明を与えることができます。道徳を形づくっているのは、さまざまな義務なのです。義務として課せられているのは、

たとえば、約束を守るといふことです。それにひきかえ動物の場合には、義務や^{べき}当為について云々することはできません」

「だとすると、自分の気に入らない人たちに対しても敬意を払うべきであつてそれは道徳的な義務なのだ、ということになりますか」とセバステイアンが知れたがった。

「そのとおりですよ」とモンタ先生は答えた。

「いまのお話でまだよく理解できないことがあります」とグローリアが言った。「いったいなぜ共感では不十分なのですか」

「それはこういうことです。共感、あまりにも限界がありすぎるし、また、不安定でもあるからです。時として私たちは、とても親しい人間に対しても憎しみの感情を抱くことがあります。奇妙に聞こえるかもしれませんが、私たちは、自分が好きな人間をも憎んでしまうことがあるのです。反感がそのまま公然たる憎しみに移行するのはよくあることで、一方の憎しみは他方の憎しみを引き起こします。そして憎しみ合いが暴力沙汰に至ること、それどころか戦争に至ることもありうるのです。もしあらゆるものが共感と反感だけによつて行われるとしたら、私たちの社会はどうなつてしまふか、想像できますか」

「そうなつたら、ゴロツキが支配する社会になつてしまふ」とアルヴァロは言った。

「たしかにそうだ」とセバステイアンが同意した。「ちよつとしたことですが、殴り合いになつてしまふだろうね」「だからこそ、私たちの共感に備わるそうした限界を補うのが道徳なのだ、と言われているのです」とモンタ先生は話をまとめはじめた。「道徳は共感の拡張にはかならない、と言ふ人もいますが、それは正しくないと思います。承認と敬意は、共感とは別のものです。(彼らがあなたの気に入らなくとも、あなたは彼らに敬意を払うべきだ) というふうには語られることがあります、これは道徳の特徴をよく表しています」

休み時間にアルヴァロは他の生徒たちに、モンタ先生の説明をどう思うか尋ねてみた。

「どう考えたらいいか、まだ整理がついていないの」とカミラは言った。

「何か引つかかることがあるの？」とグローリアが訊いた。

「もともとあまり好きではない人間にも敬意を払わなければならぬとしたら、両親が私に言うことも正しいということになるわ。嫌いな人たちに対しても礼儀正しくしなさい、って両親からよく言われるの」

「それで？」

「よく家に来るのだけれど、そのたびにうんざりしてしまふ伯母がいるのよ。その伯母がこのあいだ病気になって、ずっと横になっていなければならなかった。母は私に、伯母さんのお見舞いに行つてきなさい、って言ったわ。伯母さんは寂しい思いをしているのだから、って。もちろん私はそんなこと、真つ平だったわ。でも母は、たとえ行きたくなくてもそうしなければならぬのよ、と言ったの。そうするのは人としての務めなのよ、って。それで私は、齒ざしりする思いで伯母のところに行つて、その義務を果たしたわ」

「きつとお母さんは、その機会を通して、人を尊重するとはどういうことなのか、あなたにわからせようとしたのね」とグローリアは言った。「たとえ気に入らない人であっても、私たちは人間に対する敬意をその人にも払わなければならぬのよ」

「ほくもそう思う」とマヌエルが言った。「でもカミラ、その時にすぐにそのことがわかったかい？」

「どれほど私があるとき頭にきていたか、あなたには想像できないほどだったわ。母親は物事をしっかり見ていたんだって、今となっては思うけど、当時はまだそこまでは考えられなかった」

「尊重とか敬意とかは、自分の友だちや親しい人間以外の人にしかかわらない話のようにぼくは思うけど」とアルヴァロは言った。

「どうして？」とマヌエルは尋ねた。

「友だちだって尊重しなくてはならないって、私は思っているわ」とグローリアは、何かアルヴァロが答えようとする前に言った。

「自分の家族だってまったく同じだわ」とカミラは言い添えた。

「でも逆に、親たちもぼくたちを尊重すべきだと思うよ」とセバステイアンが言った。

「どうしてそこにこだわるの？」とグローリアは知りたがった。

「それはね、親たちはたしかにぼくたちのことを愛してくれているけど、それでも、必要な敬意や尊重をぼくたちに対して払わないことがあるからさ」

「話がよく見えないけど？」とアルヴァロが言った。

「こんなことがあったんだ」とセバステイアンは話しはじめた。「このあいだ母の友だちが訪ねてきた。小さな子どももいっしょに連れてね。ぼくの母はその子が大好きで、その場でその子に何かプレゼントをしようと思った。

そこまではいいんだ。でも、母がその子にあげたのは、よりによってぼくのレーシングカーだった！ そのときぼくは家にいなくて、夕方に帰宅してからすべてがわかった。いくらなんでも、ちょっとひどいよね。だって、そういうことは、少なくともぼくに断ったあとですべきことだろう？ 母のやったことは、ぼくに對する尊重をまったく欠いたものだと思う」

「そのとおりだわ」とカミラは言った。「親たちも不当なことをすることがあるって、私も思う。誕生日のとき私たちは限られた数の友だちしか呼んじやいけないのに、親たちは誰彼なく親戚を招待している！」

「ということは、アルヴァロの言ったことはやっぱり正しくないわけだね」とマヌエルが言った。「尊重すべきなのは、相手が友だちや知り合いでないときに限る、という考えは。自分が好意を持っている人たちに対して、ぼ

くらは敬意を払わなくてはならないんだよ」

「でも、ある人のことが好きなのにその人を尊重しないだなんて、そんなことがあるのかな？」とアルヴァロは尋ねた。

「さつき一つ例を挙げたばかりじゃない」とカミラは言った。「他にもう一人、ある友だちのことを思い出したわ。その友だちの家族はいつも彼のことを抱きしめたりキスしたりするのよ。彼はそれが嫌で嫌でしょうがない。けれども、お母さんもお姉さんたちも彼のことが可愛くて仕方がないので、嫌がられてもついついそうしてしまう。ほかは人形のように扱われているんだ、って彼はこぼしていたわ。自分が尊重されているという気持ちには彼はなれないのだけれど、家族がみんな彼のことを好きなのは確かかなわけ」

「私の従兄弟にも同じような目にあっている子がいるわ」とグローリアが言った。「彼のことをお母さんが学校まで車で送ってくれるのだけれど、別れぎわにいつもそのお母さんは彼にしつかりとキスをするの。彼はそれが死ぬほど嫌なのよ。だって、そのことでクラスメイトたちが大袈裟に囁し立てるから。私は、叔母さんがもつと彼の言うことを真剣に受け取って、みんなが見ている前で何度も彼にキスするようなことはやめるべきだと思っわ」

「それぞれとてもよい例だと思っわ」とマヌエルは言った。「両立するはずがないとアルヴァロが考えたことは、実際には同時に成り立つことがとても多い。誰かがある人を好きでたまらないとしても、好きな相手をその人が押さえつけてしまうということはやっぱり起きてしまう。愛はたしかにあるのだけれど、尊重するということが欠けてしまっている」

「子どもが仕事を選ぶときに親が口出ししてくるのも、同じだよな」とセバステイアンが言った。「親がそうするのは、特定の仕事についていたほうがあとで子どもが幸せになれるって思うからなのよは確かだけれど、子ども自身が何をしたいのかについてはまったく無頓着な親もいる。子どもの決定も尊重されなくてはならないんだってことを、

「彼らは考えてみようともしないんだ」

「でも、親の言うことがまったく正しいこともよくあるけどね」とアルヴァロは言った。「まあ、どっちにしても、ほとんどの親たちはそんなときは何も指図しないだろうと思うよ」

「それなら喜ばなくちゃ。ご両親はあなたのプライバシーに配慮してくれるのだから」とカミラが言った。「とにかくごく一般化して言えば、こういうことになるわね。愛だけでは不十分であり、尊重と敬意がさらに加わらなければならぬ、って」

「まさに君の言うとおりだよ、カミラ」とマヌエルはこの結論を支持した。「つまり、誰かがある人を愛していても、それだけではまだ、その相手をその人が尊重しているということにはならないんだ。そしてその逆に、尊重している相手を必ずしも同時に愛している必要はない」

その翌日、生物の授業が始まろうとしたときにグローリアは、「あのう、モンタ先生」と口を開いた。「先生は前回の授業のときに、いつでもお互いに尊重し合わなければならぬという人間の義務について説明してくれました。そのことについて、一つ質問したいことがあるのですが」

「私なら大丈夫ですよ、グローリア。でも手短かにね。授業も進めないといけませんから」

「よく理解できないでいるのは次のことなのです。周りの人間に対する敬意はとても大切なことであるはずなのに、どうして子どもが別の子どもをいじめるといったことが起こるのですか。それが何か自分の利益になるというのならまだしも、相手を怒らせたり馬鹿にしたりすることがただ楽しいからという理由だけでいじめが行われることもよくあります。そんなときは敬意といったものはまったく存在していない、ということにならないでしょうか」

「そのとおり！」とアルヴァロが突然大声を出した。「そうした奴らは何でもやりたい放題だ！ 卑劣なことをして喜んだり、体の欠陥を笑いのタネにしたり、ひどいあだ名をつけたり。待てよ……いま気づいたけど……うーん、

「どれもこれも自分だっでしてることだった！」。そして少し声を弱めてアルヴァロは付け加えた。「だけど昔とくらべたら、そんなことはもうあまりしなくなった……でも、自分が何をしているのか、自分でもわからなくなってしまうことはある……」

「子どもたちのそうした振る舞いについては、心理学者たちが説明を与えています」とモンタ先生は言った。「子どもたちが他の子どもたちを怒らせるのは自尊心がまだ発達していないからだ、というのが心理学者の考えです。子どもたちは、自分たちがいつかどういいう人間なのか、どんな価値を持っているのかを知りたいがっています。そのため彼らは、さしあたりまず他の子どもたちと一線を画そうとするのです」

「なぜそれが意地悪と結びつくのですか」とカミラが尋ねた。

「他の子どもたちを打ち負かすための一つの方法が、意地悪をすることだからです。周囲のものがみんな無価値だとしたら、それとの比較であつという間に自分が価値あるものと感じられるようになりますからね」

「でも、それはやっぱりひどいことです」とマヌエルは思いを口にした。

それに対してモンタ先生は、「それは通過儀礼の一つとして必要なことなので、度を越さないかぎりはそれほど問題にすべきことはありません」と応えた。

「どういうときに度を越したことになるかと先生は考えているのですか」とグローリアは知れたがった。

「こういうことだと思うわ」とカミラが言った。「私が誰かを、たとえばあなたのことを、ひどく怒らせようと思うならば、あなたを（出目金）って呼ぶかもしれない。でもあなたは、そう呼ばれるような出っ張った目をしていないということを自分で知っている。こういう場合なら、それは罪のないからかいにすぎないわ。でももし私が同じことを、実際にそういう目をしている人に言ったら、それは、人を深く傷つけるかもしれないひどい行ないだということになる」

「ただし、他の人が深く傷ついているということがいったいどういうことなのか、定義しておく必要がありますね」とモンタ先生は言った。

クラスの生徒たちはそれについて考え込んだ。ひと呼吸おいてグロリアが手を挙げた。

「私は、とにかく他の人の身になって、もし自分がその人だったらどう感じるだろうかと自問しなくてはいけないと思います」

「そのとおり。黄金律だ！」とマヌエルが言った。

「あなたたちがイバラ先生のところへよく足を運んでいたということがわかりますね」とモンタ先生は微笑みながら言葉を挿んだ。

「でも、子どもたちのあいだではいつもそんなからかいが飛び交っています」とセバステイアンが言った。「他の人の身になってみるなんて、子どもはするわけじゃないですよ」

「そうですね」とモンタ先生は言った。「まだ大人にならないうちには、対立する二つの傾向が自分のなかで戦い合うことになります。一方で私たちは、自分の周りの者たちを馬鹿にしたり笑いものにしたりに対して抑えたい欲求を感じます。他方、私たちは徐々に良心を発達させていきます。そうして、他の人間に害を加えることは良心とは相容れないということがわかってきます。こうした発達が成し遂げられると、他の人たちを軽んじたいような気持ちが芽生えても、それをすべて抑制できるだけの力を良心が備えるようになるはずですよ。これが、道徳的な成熟と言われているものでしょうね」

「でも自分を抑えることができないときは？」とアルヴァロが質問した。「たとえばカンカンに頭にきてしまったときでも、まだ自分にブレーキをかける方法がありますか？」

「それは、実際、かなり難しいことです」とモンタ先生は言った。「それにまた、非社会的な攻撃的感情はただ抑

「圧されればよいというわけでもないのです。とくに子どもたちの場合にはね。というのは、それだと、外面はよい人を演じながら内面では不合理な罪悪感をかかえこんでしまうといったことにもなりかねないからです」

アルヴァロはこの答えにとても満足したようだった。

「ではどのようなことをすればよいのでしょうか」とマヌエルは尋ねた。

「辛抱強いしつけや教育が必要です」とモンタ先生は言った。「しかし道德教育は、エゴイズムを単に否定するだけといったものであってはいけません。それとはまったく逆に、攻撃性を、私たちの現実の正当な一部として理解する必要があると思います。この攻撃的な部分は、人間の生を全体として理解する営みのうちに統合されなければなりません。そうでしょね。その存在を否定してしまつてはいけません」

「どうすれば、そうできるのでしょか」とマヌエルは尋ねた。

「子どもたちを励まして、自分たちの攻撃心に気づかせ、その存在を受け止めさせる必要があると思います。互いに結びついていない二つの世界に生きるような人間にすべきではないのです」

「でもそれだと、お互いに敬意を払い合わなくともよいということになつてしまいませんか？」とカメラは尋ねた。

「そういうわけではありません」とモンタ先生は言った。「他の人たちを軽視することなしに自分の攻撃性に表現を与えることを、人間は学ぶ必要があるように思います。道德と攻撃性とのあいだにあるのは従属関係であつて、あれかこれかの二者択一の関係ではない、ということを理解するのが大切なのです」

「では、何かの理由で誰かに怒り狂っているような人は、いったいどうしたらよいのでしょうか？」とマヌエルは尋ねた。

「そういう人はどうしたらよいのか、皆さんはどう思いますか」とモンタ先生はクラスの生徒たちに問いを差し向けた。

「その人は、相手のところに行って、話し合いを持ってとうとしてみる必要があるわね。相手を攻撃しようとしたり相手を侮辱しようとしたりするかわりに」とカミラは言った。

「他の人はどう思いますか」

「それこそが正しいことだと思います」とグローリアが言った。「そのようにして争いを避けなくてはならないと思います」

「とは言っても、あんまり頭にきすぎて穏やかに話し合うなんて無理、ということが多いじゃないか」とセバステイアンは異を唱えた。

「そんなときには、気持ちが静まるまで待つしかないわね」とカミラが言った。

「そう簡単にいくわけないよ」とセバステイアンは言った。

「簡単だなんて誰も言っていないわよ」とカミラは笑った。

そのあとは生徒たちから質問が出なかったので、モンタ先生は生物の授業を進めることができた。けれどもマヌエルは、攻撃性の問題について考えを巡らせつづけていた。とくにカミラの言ったことが気にかかった。それでマヌエルは、授業時間の最後にまた質問した。

「モンタ先生、他の人に腹を立てたり、それどころか怒り狂ったりしている大人についてはどうでしょうか。そうしたときでも大人は、お互いに敬意を払い合っているのですか。大人も、相手を傷つけるようなことを互いに言い合ったりはしないのですか」

「大人だって、子どもと似たり寄ったりのことが多い」とセバステイアンが小声で呟いた。

「ええ、そうね……」とモンタ先生は言った。「結局のところ大人たちも、周りの人間のことを陰で馬鹿にするこ

とはたしかにあります。それでも大人たちは、表立ってそうすることはありません。人前では自分を抑制する術すべを学んでいますからね。悪口の言い方も巧妙になっているのですよ」

「たとえば？」とグローリアは尋ねた。

「特定の人の面目を失わせるためにプライバシーにかかわる事柄を暴露する、といったことが時々あるじゃない」とカミラは、知っていることを述べた。

「サッカー競技場ではそれが激しいね」とアルヴァロは、思いついたことを口にした。「競技場ではサッカー選手に、敵のサポーターがひどいヤジを散々飛ばす。自分のチームを勝たせようとしてね」

「そうですね」とモンタ先生は言った。「実際、サッカー競技場では、子どもたちよりも大人のほうがましだなんてとても言えないような有様になっています。それでも、サポーターが相手側をからかう程度にとどまっているならば、それはそう大したことではありません」

「でも、大したことになりかねないと思いますよ」とセバステイアンは口を挟んだ。「サポーターたちが暴れ出して、手当たりしだいに物を壊したりお互いに殴り合ったりするときには。競技場で死んでしまった人だっているじゃないですか」

「まったくあなたの言うとおりです。その場合にはもう、害がないなどとは言えません」

「だからサポーターの集団も、お互いに尊重し合うよう課せられているはずですよ。これは、個々の人間にもそうすることが求められているのとまったく同じことです」とマヌエルは言った。

「国際試合のときはそうなるよ」とアルヴァロが言った。「だって国際試合では国中のサポーターがいつしよに集まって、争いをすべて忘れて、国の代表チームを応援するんだから」

「そうかもしれないけど」とグローリアが言った。「でも、そのサポーターたちは今度は外国のチームのファンた

ちを攻撃するじゃない」

「それじゃあ君は、外国チームのファンたちに対しても敬意をもって接すべきだなんて思っているのか」とアルヴァ口は、信じがたいとでもいうように尋ねた。

「もちろん、そう思うわ」

「いま問題になっている事柄については、もう少し掘り下げて考えたほうがよさそうですね」とモンタ先生は提案した。「国内のサッカーチームのファンどうしがお互いに敬意を払い合うべきだということについては、先ほど皆さんの理解が得られました。ところがいま、外国チームのことが話題になったら、それを疑問視する声があがっています。それはちよつと差別的な態度ではないでしょうか」

「それはどういうことでしょうか？」とグローリアが尋ねた。

「まるで、外国から来た人間はもともと価値が劣っていて、私たちと同じ権利は持っていないとでも言われているような感じがするのです。そうだとすると、外国人に敵対的なさまざまな動きにスポーツも絡めとられているということになります。そうした動向はすでにこの国に存在していますからね。私たちのところでインドネシア系の少数民族や東洋系の移民が時とどのような扱いを受けることがあるか、考えてみてください」

「あらゆる人間に同じ敬意を払わなくてはならないとほくは思います」とマヌエルは言った。「だって黄金律を当てはめてみれば、同じように敬意を払ってもらいたいとあらゆる人が望んでいるとことがわかるのですから」

「それは、言うのは簡単だけど、実行するのは難しいな」とセバステイアンが反論した。「結局、多くの人間は私たちとは違うのだし、そういう人たちは、ぼくたちには馴染みのない習慣に従って生きている。だから、彼ららばくたちにとって鬱陶しいのさ」

「だけど、自分たちが抱くそうした反感に対して自分たち自身で何かすべきだとは思いませんか？」とモンタ先生

は尋ねた。

「たしかにそう思います」とカメラが叫んだ。「でも、どうしたらいいんでしょう?」

「外国人たちのところにいると自分たちに馴染みのないことがたくさんある、とセバステイアンがついさつき言いました。まったくそのとおりです。だからこそ私たちは、その馴染めなさというものを克服する必要があるのではないのでしょうか。自分たちと違う文化をもっとよく知るよう努力しなければならぬと思うのです。これは近隣国と付き合ううえでとくに大切なことです」

「それはいったいなぜでしょうか」とグローリアが尋ねた。

「なぜなら、国家も個人とまったく同じだからです。国家は、国民としての誇りといったものをすぐに作りあげていきます。それが国民の自尊心を強めることになるわけですが、その誇りは同じようにすぐに度を越して、近隣国に対する攻撃的な態度へと変質しかねないものです。そうなると脅しが始まり、腕力をちらつかせるようになりまします。子どもの場合とまったく同じですね。これはよくないことです。こうした威嚇的な振る舞いによって、いともたやすく戦争が始まってしまいますからね。そのような戦争ヒステリーが進むことで道徳に関する諸概念が歪められてしまうという点でも、それはよくないことです」

「どういうことでしょうか」とマヌエルが質問した。

「たとえば〈勇氣〉といった概念は、そうした状況ではとても狭い意味で用いられがちです。そうなると、軍事的防衛を支持する人だけが勇氣のある人とみなされるようなことになってしまいます。けれども、防衛のための戦争と攻撃のための戦争とを区別するのは、容易なことではありません。それは、歴史を見れば明らかです。これも、子どもどうしの喧嘩に似ています。ふつう戦争は、お互いに威嚇し合うことで勃発します。だから本当の勇氣は、国の場合でも個人の場合でも、自分や友だちを思いとどまらせることにあります。つまり、憎しみ合うこと

の悪循環に嵌まり込んで、しまいには暴力の行使にまで至ってしまうようなことは、勇気ではないのです」

「どんなときでも暴力は避けないといけないのですか」とアルヴァロは質問した。

「もちろんですとも。平和のためにあらゆることを行なうのが、道徳的に正しいことなのです」

「それでは、私たちは黄金律を国々のあらゆる振る舞いにも適用すべきなのですか」とカメラが尋ねた。

「そのとおりです。黄金律は、どのような場合でも用いることができます。子どもたちが攻撃的な行動を抑制しなければならぬのとまったく同じように、政府にも、思慮深く行動する責務があるのです。他の国民に対する憎悪を掻きたてるようなことは、戦争に至りかねないのでとても危険なことです。しかし問題はそれにとどまりません。そうした扇動は、その結果を別にしても、それ自体として非道徳的なことなのです」

Wie sollen wir handeln?: Schülergespräche über Moral (6)

**verfasst von Ernst TUGENDHAT / Celso LÓPEZ /
na María VICUÑA
übersetzt von SUZUKI Takao**

Abstract In diesem Kapitel wird zuerst diskutiert, wo der Unterschied liegt zwischen dem instinktgesteuerten Altruismus von Tieren und dem normativen Altruismus von Menschen, wobei eigentlich nur letzterer als moralisch bezeichnet werden kann. Nach den Autoren besteht die Grundnorm der Moral darin, dass man die anderen achten, sie anerkennen soll und andere anerkennen heißt, ihre Rechte anzuerkennen. Anschließend wird darauf hingewiesen, dass Anerkennung und Achtung etwas anderes sind als Sympathie. Denn Sympathie sei zum einen viel zu eingeschränkt und zum anderen auch nicht beständig. Moral sei keine Erweiterung von Sympathie, sondern ein Ersatz für die Begrenztheit unserer Sympathien. Schließlich wird die Frage behandelt, wie Antipathie, die zur Gewalttätigkeit oder sogar zum Krieg führen kann, zu überwinden ist.

Key words: Sympathie, Antipathie, Moralität